

古代尾張国と参河国 — 文献史料と木簡にみえる物品・特産物からみた特色 —

西宮 秀紀

はじめに

全国の出土木簡数に比べると、愛知県（尾張国・参河国）から出土した古代の木簡数は少ないが、それでも後述するように八箇所を超えるようになった。しかし、文字数も少ないため情報量も少なく、また一箇所から大量に出土するというものもないので、なかなか出土遺跡の古代史像を語れないのが現状でもある。

木簡の中でも、特に荷札や附札は物品に付けられたものである。物品名が記されていることもあるし、たとえ物品名が記されていないくとも、数量単位などどのような物品に付けられていたか、推測することが可能となっており。また、物品は都城への税として運搬される際付けられていたこともわかっている。税体系との関連でみるのが理解しやすいであろう。

以上のことは逆に、従来から知られている文献史料の両国税体系を検討することによって、現在どのような木簡が

出土しているのかいないのか、またその理由は何であるのか、を考えることも可能にしてくれる。それらを考えることは、今後の遺跡からの木簡の出土を考えた場合、どのような税体系の中で使用されたものか、どのような遺跡なのか推測する手がかりになると思われる。

筆者はこれまで、主として三河地域の自治体史を手がけ、そこからいくつかの物品と古代参河国の特徴を指摘してきた^①。そのような問題関心とともに、古代の愛知県の税負担物、つまり古代尾張・参河国から貢納される物品、またそれらの中の特徴的な物品（いわゆる特産物）を手がかりに、両国の特色の一端を指摘してみたい。

一、文献史料からみた物品・特産物

1、稲と犬頭糸・海産物と生道塩

まず最初に、文献史料から古代尾張・参河国とかわる物品をみてみたい。古代の両国の物品の、大きな手がかり

となるのが「はじめに」でも述べたように当時の税体系である。日本の古代では、周知のごとく和同開珎に代表される貨幣が発行されていたが、経済の主体は実物貢納経済でもあるので、物品を地方から朝廷に収めるというのが大きな税の体系であった。

律令制の基本的な税規定を簡単にふり返ると、周知のように租・調・庸であるが、そのうち租は支給された口分田から收穫されたうちの約3%の米（稲穀）であり、これは各国の財源となるものである。古代両国の租の数量を考える上で、十世紀初頭成立の『延喜式』規定の公出挙の正税・公廩・雜稻の規定が参考となる。

①『延喜式』卷二六主税寮上5出挙本稻条

・尾張国、正税・公廩各廿万束、国分寺料二万束、文殊会料二千束、修理地溝料三万束、救急料二万束、
・参河国、正税・公廩各廿万束、国分寺料二万束、修理志摩国分寺料三千束、文殊会料二千束、修理地溝料三万束、救急料二万二千束、

これを見ると両国の正税・公廩・雜稻とも、ほぼ同じであることがわかる。これらは国内で出挙される本稻の量であるが、規定として両国はほぼ同国力とみなされていたと言えよう。^②

しかし、各国で收穫された稻穀は各国内内の蓄積ある

いは流用・消費で完結していたわけではなく、都城にも貢進されていた。それが以下の二つの規定である。

一つ目が年料春米で、これは畿内に近い国や海よりの諸国から、毎年正税から一定量の春米を大炊寮（但し黒米〈精白していない玄米〉は民部省と内蔵寮）^③に供進させ、中央官人の食料に充てる米のことである。

②『延喜式』卷二十三民部省下49年料春米条

・尾張国〈大炊一千八十石、糯廿石〉、
・参河国〈大炊七百石〉、

とあり、大炊寮へ送る量として、尾張国は一〇八〇石で、春米を中央に送る二十二國中、美濃・讃岐・伊予国一四〇〇石、近江国一二〇〇石・備後国一一九五石・備前国一一七〇石・播磨国一一〇〇石に次ぐ多さであり、参河国の約一・五倍という数値である。参河国は年料春米を京進する国の東限であり、尾張国が参河国より畿内に輸送に近いということもあろう。ちなみに、糯は尾張国のみである。

二つ目は年料租春米で、諸国の租穀を春米にして、太政官符により京進させた米のことである。

③同式51年料租春米条

・尾張国〈一千石〉、
・参河国〈一千石〉、

とあり、年料租春米輸納国は全部で一八国挙がっているが、

美濃国二三〇斛・近江・伊予・播磨・備前・讃岐国二〇〇石、遠江・越前・加賀国一三〇〇石（斛）に次いでおり、尾張・参河国は同数である。^④

以上に対して、調は繊維製品や特産物、また庸は十日間程度の労働に対する代替物で、これらは各地域から、運脚夫によって都城へ運ばれる物品であった。それ以外に、養老元年十一月二十二日、百姓（正丁）の副物と中男（十七〜二十歳男子）の調が廃止され、中央で使用する物品は主計寮が毎年の必要量を計算し、諸国に命じて中男を労働させて進上し、もし不足の場合は人夫の雑徭で割り当てる中男作物（『類聚三代格』巻八）、また同じく諸国に割り当てられた、調・庸物などの補完のための物品としての交易雑物、などがあつた。

調・庸の税に関しては、田令・賦役令に規定されているが、令文はその性格上簡潔なものである。その施行細則は「弘仁式」・「貞観式」を経て、十世紀はじめに『延喜式』として集大成され、それがほぼ現存しているので、それに関する史料を掲げたい。^⑤

④『延喜式』巻二十四主計寮上16尾張国・17三河国条

【尾張国】

・調、両面八疋、冠羅・鼠跡羅各一疋、二窠綾廿疋、三窠綾五疋、七窠綾三疋、薔薇綾五疋、帛二百疋、

緋糸・縹糸・緑糸各卅絢、皂糸廿絢、練糸二百卅二絢七両二分、生道塩一斛六斗、〈與調塩共進〉、自余輪絹・糸・塩^一。

・庸、韓櫃十五合、〈塗漆著鏤五合、白木十合〉、自余輪米・塩^一。

・中男作物、麻一百斤、黄蘗二百斤、紙、紅花、胡麻油、雉腊、雜魚腊、煮塩年魚、雜魚鮓、

【参河国】

・調、襷羅、藻羅各一疋、一窠綾十五疋、二窠綾五疋、犬頭白糸二千絢〈夏調〉、雜魚楚割二千五百五十一斤、鯛臚一百斤、鯛楚割九十斤、貽貝鮓三斛六斗、自餘輪白絹^一、

・庸、韓櫃十五合。〈塗漆著鏤二合、白木八合〉、自余輪米・塩^一、

・中男作物、麻一百斤、黄蘗三百斤、紙、紅花、席、胡麻油、慢椒油、雉腊、雜魚腊、海藻、

これらは国ごとに規定された貢進物品名であるが、両国を比較（表1）すると、調は絹製品（羅・綾）や絹糸、庸は韓櫃、中男作物は麻・黄蘗・紙・紅花・胡麻油・雉腊・雜魚鮓が共通している。共通するとはいえ量的・質的な問題があり、また全国で二国のみの特徴の可能性もあるので、隣国の伊勢・遠江国と比較すると、羅・黄蘗・雉腊は尾張・

表1 尾張・参河国と調・庸・中男作物

	物品名	尾張国	参河国	(参考) 伊勢国	(参考) 遠江国
調	両面	8 疋			
	羅	冠 羅 1 疋	襴 羅 1 疋		
		鼠跡羅 1 疋	藻 羅 1 疋		
	綾		一窠綾 15疋	一窠綾 16疋	一窠綾 13疋
		二窠綾 20疋	二窠綾 5 疋	二窠綾 16疋	二窠綾 8 疋
		三窠綾 5 疋		三窠綾 6 疋	三窠綾 20疋
		七窠綾 3 疋			七窠綾 25疋
					小鸚鵡綾 27疋
		薔薇綾 5 疋		薔薇綾 4 疋	薔薇綾 24疋
					瓜核綾白 10疋
					〃 赤 20疋
					呉服綾白 20疋
					〃 赤 15疋
	帛	帛 200疋		帛 200疋	緋帛40疋・縹帛15疋・ 椶帛25疋
					御襪料白絹12疋
	絹			白絹 100疋	
	糸	緋糸 40絢	大頭白糸2000絢	白糸 880絢	
		縹糸 40絢		赤引糸 110絢	
		緑糸 40絢		神服糸 100絢	
		皂糸 20絢		御調糸 20絢	
		練糸242絢7両2分			
	布				
	塩	生道塩 1斛6斗			質布 12端
	魚介類		雑魚楚割 2551斤		
			鯛臚 100斤		
			鯛楚割 90斤		
			胎具鮓 3斛6斗		
	自余	絹・糸・塩	白絹	絹・塩	絹 (但し山香郡の調・庸は布)
庸	韓櫃	韓櫃 15合	韓櫃 10合	韓櫃 23合	韓櫃 20合
	自余	米・塩	米・塩	米・塩	糸
中男作物	麻	麻 100斤	麻 100斤	麻	
	黄蘗	黄蘗 200斤	黄蘗 300斤		
	紙	紙	紙	紙	
	紅花	紅花	紅花	紅花	
	木綿			木綿	木綿
	茜			茜	
	席		席		
	油	胡麻油	胡麻油	胡麻油	胡麻油
			櫻椒油	櫻椒油	
	雉腊	雉腊	雉腊		
	魚介類	雑魚腊	雑魚腊	雑魚腊	与理等魚腊
		煮塩年魚		煮塩年魚	
		雑魚鮓		雑魚鮓	
	海藻類		海藻	滑海藻	

参河国のみであり、これは両国の特色ともいえる。

そこで、両国の貢進物の特色をみていこう。尾張国と参河国の調・庸・中男作物を比較した場合、調は絹製品・糸の品目は同じであるが、絹製品でみけると尾張国から両面（錦）・羅・綾・帛と呼ばれる絹と緋・縹・緑・皂などの色糸や練糸が、参河国に比べて種類が豊富で、両面・帛とあるように質的に優れていると言える。一方、参河国からは犬頭糸二〇〇〇紬という特徴的で大量の糸が規定されている。

それに対して、尾張国だけ調に生道塩とあり、雉魚楚割・鯛臚・鯛楚割・貽貝鮓などの魚介類は参河国だけである。「自余」の物品をみても尾張国だけ塩の規定があり、塩、生道塩は尾張国の特産であったことがいえる。一方、魚介類は伊勢・遠江国にもみえておらず、参河国の特産品といえる。鯛楚割・貽貝鮓・鯛枚乾は後述する参河国から斎宮へ貢進される規定にみえており、数量的にみて貽貝鮓が都城へ送られる量の約二倍で、鯛製品は同量であるところからも、とりわけ特産品であったということは言えよう。

また庸の韓櫃は各国に割り当てられた製品であり、「自余」の物品の米と塩は尾張・参河両国ともに挙げられているが、これは隣国の伊勢国とも同じであり、両国の特徴というわけではない。

ところで、中男作物では黄蘗・雉腊は隣国の伊勢・遠江国で貢納されていないところから、これも両国の特色といえよう。参河国の席・海藻は尾張・伊勢・遠江国にみられないが、伊勢国は滑海藻を貢納している。なお、参河国の椶椒油と尾張国の煮塩年魚・雉魚鮓は遠江国にもみえるので、参河国だけの特色ではない。

次に、調・庸・中男作物と関係が深いと思われる、交易雑物でも同じようなことが言えるのかどうかみてみよう（表2）。

⑤『延喜式』卷二十三民部省下63交易雑物条

・尾張国へ白絹十二疋、絹百五十疋、油三石、樽二合、苧一百十斤、鹿革廿張、鹿皮十張、鹿角十枚、蕤子五石、胡麻子四石、荏子四石、鹿角菜三石、凝菜卅斤、於胡菜卅斤、

・参河国へ白絹百廿疋、鹿革六十張、樽二合、苧九十斤、黍子廿石、胡麻子三石、鹿角菜二石、海松五十斤、凝菜卅斤、海藻根十斤、青苔五十斤、鳥坂苔五十斤、於胡菜卅斤、那乃利曾五十斤、

まず絹製品では尾張国が絹一五〇疋と多いが、参河国は白絹一二〇疋とあり、隣国の伊勢国が白絹一二疋・絹三〇〇疋を貢納することになっていたことからすれば、参河国

表2 尾張・参河国と交易雑物・年料別貢雑物・年料雑器

	物品名	尾張国	参河国	(参考) 伊勢国	(参考) 遠江国
交 易 雑 物	白絹	12疋	120疋	12疋	
	絹	150疋		300疋	68疋
	油	3 石			
	樽	2 合	2 合	2 合	2 合
	苧	110斤	90斤		130斤
	鹿革	20張	60張		30張
	鹿皮	10張			10張
	鹿角	10枚			
	蕘子	5 石			
	胡麻子	4 石	3 石		2 石
	荏子	4 石			
	黍子		20石		
	鹿角菜	3 石	2 石	2 石	
	凝菜	40斤	30斤	30斤	30斤
	於胡菜	30斤	30斤	30斤	
	海松		50斤	50斤	
	海藻根		10斤	10斤	10斤
	青苔		50斤	50斤	
	鳥坂苔		50斤	5 斤	
	那乃利曾		50斤	50斤	
	水銀			400斤	
	木綿				470斤
	大匏				30口
	干薑				100斤
	種薑				10石
年 料 別 貢 雑 物	筆	100管	150管	100管	100管
	紙麻	90斤	10斤	110斤	
	青木香	160斤			
	馬革	6 張			
	黄楊		6 枚		
	零羊角				4 具
年 料 雑 器 (瓷 器)	大椀	5 合			
	中椀	5 口			
	小椀	20口			
	茶椀	20口			
	盞	5 口			
	中擎子	10口			
	小擎子	5 口			
	花盤	10口			
	花形塩坏	10口			
	瓶	10口			

の白絹一二〇疋はやはり特色と言える。

また、両国とも海に面しているにもかかわらず、海産物は参河国の種類が多く、尾張国は三種類だけで、しかも参河国より若干量が多いに過ぎない。ただ鹿角菜は全国的にみて尾張・参河・伊勢国からしか貢納されておらず、東海地域三国の特産物とも言える。さらに参河国の海産物は伊勢国のそれと同種類であり、しかも烏坂苔を除いて量が同量である。他国と比べると、参河国は量的には青苔と烏坂苔、那乃利曾が最高値であるところから、これらも特産物といえよう。^⑦

以上までの物品名を概略すれば、尾張国では塩・生道塩、参河国では犬頭糸・白絹、それに海産物（魚介類・海藻類）が特徴的だと言えよう。

そこで、この点についてももう少し詳しくみてみたいが、行論上参河国の犬頭糸から述べていこう。犬頭糸については、すでに詳論したところであるが、参河国の特徴を知る上で欠かせないので、以下本稿に関わる規定のみ、みていきたい。

⑥『延喜式』卷二十四主計寮上5調糸条

凡貢夏調糸者、伊賀三百絢、〈色糸〉、伊勢八百八十絢、〈白糸〉、参河二千絢、〈犬頭糸〉、越前一百絢、安芸五百絢、阿波一千五百絢、並七月卅日以前納訖、

伊勢 参河 近江 …… 阿波

右、十二国、並上糸、

とあり、糸は上糸・中糸・鹿糸と区分されている中で、参河糸は「上糸」となっている。また、絹と純（この場合、劣る絹をさす）のうち絹を輸す国となっており、品質がよく、しかも他国と比べて圧倒的に数量が多かったことがうかがえる。

⑦『延喜式』卷十五内蔵寮54諸国年料条

絶八百五十疋、

調二百疋、〈白一百疋、参河国所進、……〉、

交易六百五十疋、〈……〉、

糸四千七百七十四絢、

調三千百八十絢、

白糸二千八百八十絢、〈二千絢参河国所進、……〉、

・…・、

色糸三百絢、〈……〉、

交易一千五百九十四絢、〈……〉、

とあり、やはり調二〇〇疋のうち白一〇〇疋、白糸二八八〇絢のうち二〇〇〇絢が、参河国から内蔵寮へ納入されたものであることがわかる。

さらに、調・庸などは都城に送られるのが原則であるが、その例外として定められた斎宮への貢進規定の中に、参河・

⑧『延喜式』卷五齋宮78調庸雜物条

これによれば、諸国から送られる調・庸で齋宮に支出される絹七〇〇疋のうち、尾張国から長絹二〇疋、参河国から白絹三〇疋が送られており、また尾張調糸二〇〇絢が送られている。参河国の糸がここにみえないのは、犬頭糸

いわば、両国とも絹糸が作られ、後述する尾張国正税帳

ここからも参河国の糸が重視されていたことがわかる。

特徴といえよう。

一方、③の齋宮に送られる物品の中に尾張国からの塩が

みえる。志摩国十五石に対し、尾張国から六十五石という約四倍の量を貢納する規定である。先述したように尾張国の特徴的な物品の一つは塩であった。生道塩は一斛六斗とみえ、調の塩とともに進上するとある。

生道塩は、他に『延喜式』卷三十三大膳職下1東寺中台等条に東寺の中代五仏（中胎）・五仏（五菩薩・五忿怒）

に対する料物として「生道塩日別五合七勺」とあり、年間の使用日数を計上して太政官に申請することになっていた。式文のこの箇所に関してはすでに福岡猛氏によって、『延喜式』写本に異同があることが指摘されている^⑪。天理図書館所蔵梵舞本のように本文に「生道塩」が「塩」とのみあり注記は何もなく、また土御門本の『延喜式』には「塩」の字の下に朱点があり、その右横に「生道塩（読云：ミ「イカ」クチ堅塩也、大如三大瓮（益カ））、一果搗得^⑫塩一斗許、生道尾張国郡里名也」と朱筆の注記があり、享保版本では、本文に「生道塩」とあり頭注に、右の注記文とほぼ同文がみえるところから、元来「塩」とあったものの、注記として「生道塩」があり、後に享保版本のように「生道塩」となったとされている。

また、『東宝記』第一の承和十一年（八一）六月十六日の太政官符に、太政官から宮内省に対して承和十一年七月一日から十二月二十九日までの東寺供養費として、物品

の中に「塩一斛一斗七升四合二勺 日別五合七勺」とあり、日別に関しては『延喜式』の先の規定と一致するところから、その法源とみられる。しかし、そこには「塩」とあるだけであることから、元々は「塩」だけだったのが、生道塩と傍注されたことにより、享保版本の形となったと言えるであろう^⑬。

なお、毎日使用すると、承和十一年は臨時としても翌年嘉承元年は三五四日であるので、五七勺を掛けると、二〇一七八勺（二斛一升七合八勺）となり、先の尾張国からの調としての生道塩の量では不足することになる。したがって、もし先の調の規定の生道塩が東寺用に進上されていたとするなら、数量が不足することになる。

ところで、生道の由来であるが、郷名としての生道は『和名類聚抄』にはみえず、文和三年（一一三四）四月二十三日の熱田宮権宮司家領注進状案に生道郷とみえるのが初見である。また先述した『延喜式』の土御門本の傍注に「生道塩 読云：ミ「イカ」クチ堅塩也、大如三大瓮、一顆搗得^⑫塩一斗許、生道尾張国郡里名也」とあり、現在東浦町生路の地名があるので、従来から述べられているようにそこに当てられるであろう。但し、残念ながら生路では製塩遺跡が発見されておらず、集積場所にすぎず調塩と同質とする説もある^⑭。ただ、大きさが大甕のようで一個が約一斗

とあり、堅塩が焼き固められもので品質が上質のものであるとすれば、それは東寺用に他の調塩とわざわざ区別するために製作された、特殊な巨大固形塩であったともいえる^⑪。東寺への貢進物の生道塩は、平安時代尾張国知多郡生道から貢進されたもので、おそらく時期的に森康通氏の6段階説の6番目の鉄釜（石釜・石鍋）で生産した粗塩のなかりを自然滴下させ自然乾燥させた粗塩にならざるをえず、傍注の形状からすれば甕形土器などに収め固めた巨大固形塩を想定せざるをえない。

立松彰氏は、生道が知多の中では東海道に近く、両村駅にも近いところで、境川の船便も利用でき、そのため生道の地が選ばれ、ここに都に送るべき「生道塩」を集積する役目を帯びた官衙的な施設でも設置されていたのではないかと推測している^⑫。

知多の塩を生道に集積する理由として、土地の利便性を想定するが、やはりなぜ生道の塩かという説明としては弱いところがある。命名されるには命名される大きな理由があるはずで、食料品であれば上質性と量的多さ、あるいは地名としての名義が根幹と成ろう。知多郡でとれた塩の生産性あるいは品質の良さ以外に、生道^{いくぢ}という地名が「生鹽」に通じるところから、生命力を活性化させる激しい力のある塩としての「生道塩」伝承が生まれた可能性があろう。

ここで式文に立ち返ると、式文の規定の数量からして東寺用でも不足するぐらいの量であり多用できないこと、また奈良時代の文献に見えないこと、参河国の犬頭系にしても平安時代に入ってから名称であること、などからすれば、尾張国の知多郡生道からの塩は、特に生道塩と名付けられ貢進されるようになったが、その使用先として東寺の貢進塩名に由来が残ったと考えるのが穏当ではあるまいか。東寺では、当初何らかの理由で生道塩と明記していなかったが、後生これまた何らかの理由で生道塩という名称を名乗るようになったのであろう。この点、二章でも少し述べてみたい。いずれにせよ、尾張国の調規定の生道塩は、平安時代に東寺が成立し、その東寺用として知多郡生道から貢進される塩の名称を、特に地名の呪術的な意味を含め生道塩と呼んだと憶測される。また、生道塩が尾張国（の知多郡）の特産物としてみなされていたことは言えるであろう。

2、鹿製品・青木香・瓷器

次に、上記以外の特産物をみてみたい。調・庸・中男作物にみえなかった物品で、②の交易雑物にみえる物品（表2）として、まず鹿製品がある。鹿革は武蔵・上野国と参河国が六〇張と多く、尾張国は鹿皮・鹿角が目につく。鹿

革は革の短甲・附用（『延喜式』卷二六主税寮上76戒具料度条）に、鹿皮は祭具などに用いられた（『同』卷一四時祭上12鎮花祭条など）と思われ信濃国が九〇張と多い。鹿角は年料雑葉でも貢納される（『同』卷三七典葉寮47撰津年料雑葉条など）ように薬用に用いられた。鹿製品の数値が参河国に多いのは、北部を信濃国と山で接しているからであろう。

また、尾張国だけの物として稗子があり、胡麻子は五石の近江・丹波・紀伊・伊予国について、四石の尾張国、三石の三河国と続く。油は胡麻子からとることからすれば、胡麻子の生産も高かったことと、それを油に精選する技術をもっていたこともわかる。なお、黍子は全国で参河国だけであり、参河国の特産物と言えよう。そのことは、③の斎宮に送られる物品にも、参河国からだけ黍子が貢納されていることからわかる。

次に年料別貢雑物は、諸国のうち四三国と大宰府から決められた物品を毎年京進する制度で、これは調・庸制を補完する物であった（表2）。

⑨『延喜式』卷二十三民部省下53年料別貢雑物

- ・尾張国（筆一百管、紙麻九十斤、青木香一百六十斤、馬革六張）、
- ・参河国（筆一百五十管、紙麻十斤、黄楊六枚）、

とあり、他国と比べて特徴的なのは、表2からわかるように尾張国の青木香、参河国の黄楊である。

青木香は、『延喜式』卷二五内蔵寮54諸国年料条に「青木香二百七十斤（尾張国一百六十斤、相模国八十斤、美濃国三十斤）」とあり内蔵寮に貢進されていたこと、また『同』卷三七典葉寮51尾張年料雑葉条に、尾張国四十六種の内として青木香一八斤が典葉寮にも貢進されることになっていた（表3）。とりわけ内蔵寮という天皇の家産組織への貢進料が多いのが特徴であり、典葉寮と内蔵寮への貢進

表3 青木香の貢進国・量

道別	国名	量	(備考)納入先
青木香	東海道	尾張 18斤	典葉寮
		下総 1斤5両	
		常陸 30斤	
	東山道	近江 16斤	
		上野 10斤	
	山陽道	下野 20斤	
	東海道	播磨 2斤	内蔵寮
	東海道	尾張 160斤	
	東山道	相模 80斤	
	東山道	美濃 30斤	

『延喜式』卷37典葉寮51条と『同』卷15内蔵寮54条による。

料を合わせると、二位の相模国の二倍の多さであった。

『延喜式』卷十三中宮職14潔斎条によれば、三月三日と九月九日の御燈のおり使用される料物として、青木香小一兩が内蔵寮から出されており、皇后が潔斎のおり香として使用していたことがわかる。また、『同』卷十三図書寮3御斎会条によれば、正月最勝王経斎会に青木香が二斤二兩内蔵寮から供給されており、また『同』卷十三図書寮9香花条にも寺ごとに青木香が八兩使用されており、『同』卷三十七典葉寮2臘月御葉条に青木香三兩が、また『同』卷三十七典葉寮3中宮臘月御葉条に青木香三兩が、典葉寮庫から供給されることになっていた²³⁾。

ところで正倉院の宝物に、

・(紙箋)「青木十二兩」(青木香裏 白羅) (北一一七)

・「青木香六斤小」^{袋重九兩小} (青木香袋 布) (袋 一一)

・「青木香十九斤八兩」(青木香袋 布) (袋 一三)²³⁾とあるように、一番目は紙箋への墨書であるが「青木」と記されているところから、「青木香」は「青木」とも略称されていたようで、一番目は白羅の裏、二・三番目は布の袋に収められていた²⁴⁾。

また、参河国の黄楊であるが、黄楊は参河国と土佐国しか規定がなく、内匠寮で三位以上の位記の軸に加工された²⁵⁾。

また『同』卷十二内記式15位記装束条には、神位記の三位以上と貴族(・僧都以上)の三位以上に使用された²⁶⁾。そのほか、馬革や筆・紙麻があるが、特に他国と比べて抜きん出ているわけではない²⁷⁾。

⑩『延喜式』卷三十七典葉寮51尾張年料雜葉・52参河年料雜葉条は長文であるので全文を掲げないが、尾張国四六種の内、青木香一六斤が特徴的なのは先述した通りである。一方、参河国二一種の内の特徴として白殭蚕があり、蚕が死んで白く固まったもので、これも表4でわかるように、

表4 白殭蚕の貢進国・量

	道別	国名	量	備考	
				糸	絹
白殭蚕	東海道	伊勢	10兩	*上	○
		参河	2兩	*上	○
	東山道	近江	1兩	上	○
		丹波	2兩	中	○
	山陰道	丹後	3兩	中	○
		但馬	2兩	中	○
		因幡	2兩	中	○
	山陽道	播磨	2兩	中	○
		美作	2兩	上	○
		備前 安芸	2兩	上	○

- 1) 『延喜式』卷37典葉寮51・52条による。
- 2) 備考は、『延喜式』卷24主計寮上5・6条による糸・絹の貢進国で、糸の*は『同』卷15内蔵寮54条に白糸貢進規定がある。

進上する十一国はいずれも絹や糸の進上国で、上糸のところが多いので、これも参河国が養蚕と深い関係があったことを示す証拠となるう。

⑪『延喜式』卷二十三民部省下60年料雑器条

尾張国瓷器、大椀五合、〈径各九寸五分〉、中椀五寸、〈径各七寸〉、小椀、〈径各六寸〉、茶碗廿口、〈径各五寸〉、盞五口、〈径各四寸七分〉、中掣子十口、〈径各五寸〉、小掣子五口、〈径各四寸五分〉、花盤十口、〈径各五寸五分〉、花形塩坏十口、〈径各三寸〉、瓶十口、〈大四口、小六口〉、

とあり、尾張国の瓷器などが挙がっている。瓷器は灰釉陶器と緑釉陶器をさす場合があり、また黒の鉄釉もあるというが、併記されている長門国が緑釉陶器進上であった可能性から緑釉であるとされている。²⁸⁾

ところで、「神御」に供する雑器は八月上旬に、宮内省の史生が五国に派遣され造ることになっていたが、尾張・参河国にも各一人派遣されることになっていた。その種類に関しては、

⑫『延喜式』卷七踐祚大嘗祭17雑器条

・尾張国所^レ造、甕八口、缶五十口、管坏卅口、甕八口、盆十口、短女坏卅二口、酒瓶八口、匱十六口、片坏卅口、陶白八十口、飭甕八口、高盤卅口、埴十二口、都

婆波十二口、酒盞十二口、酒垂八口、

・参河国所^レ造、等呂須伎卅口、都婆波卅二口、〈大十六口、中十六口〉、多志良加八口、山坏、小坏各六十口、已豆伎、匱各六十口、

とあり、踐祚大嘗祭のおりに「神御」に供する雑器があり、両国から雑器が貢納されることになっていたことがわかる。『(貞観)儀式』第四にも同様の規定があり、遅くとも貞観期に遡ることがわかる。²⁹⁾

そのほか、蘇の貢進について

⑬『延喜式』卷二十三民部省下58諸国貢蘇条

・尾張国十五壺〈五口各大一斤、十口各小一升〉、
・参河国十四壺〈四口各大一升、十口各小一升〉、

(中略)

右八箇国、爲^二第一番^一〈丑末年〉、

とあり、蘇が各国から年ごとに順番を決めて貢進されることになっていた。尾張・参河国からもほぼ同数貢進される規定になっており、平城宮から実際に貢進されたことを示す、「参河国貢蘇」と記した付札が出土している。³⁰⁾

ところで、奈良時代の尾張国府・国司が関与していた税や物品の実情を知る上で、重要な史料が尾張国正税帳である。³¹⁾ 尾張国のものとしては天平二年度と同六年度の正税帳が残されているので、そこにみえる税や物品に注目してみ

よう。

まず、天平二年度の方は、二断簡しかない。決算にわたるA断簡（正集十五卷）の首部は穀・穎稻（穂首刈された稻）・古糲や醬・末醬などの記録、B断簡（塵芥七卷）は『延喜式』卷三十二民部省上²東海道条などの郡名の記載順から春部郡の記載とされる部分と、それに続く山田郡の首部からなるもので穎稻・穀に関する記録の記載部分が残されているのみで、進上物・交易物の部分が残存していないため、あまり情報を得ることができない。

一方、天平六年度のもは首部とみられるA・B・C断簡と、それに続く海部郡と思われるF・H・D断簡、中嶋郡と思われるD・G・I・E断簡、葉栗郡のE断簡、知多郡から末尾部分であるJ断簡が残存している³³。それによれば、首部にあたるB断簡には錦生と綾生の食料が書き上げられており、C断簡には修理する綾の綜十七具料として少宝花（有綾文・無綾文）・散花（有綾文・無綾文）・少車牙無綾文・磯形無綾文が挙がっている。『続日本紀』によれば、和銅四年に諸国に挑文師が派遣され錦・綾を織ることを教習させており（閏八月丁巳条）、翌五年には尾張・三河両国など二十一か国に綾・錦を織らせた（七月壬午条）とあり、奈良時代初頭には錦・綾の生産に力が注がれたことがわかる。そのことからすれば、『延喜式』の尾張国の

調に挙げられている文様と異なり、錦も『延喜式』には規定が無いものの、これらが奈良時代の尾張国の調だったもので、国衙工房で雇われ年間錦三匹と綾五十二匹が織られていたことが窺える。

次に交易雑物であるが、正税帳B・C断簡に進上交易とあるのは白貝内鮓・苧・鹿革・鹿皮・雑鮓³⁴・瓠で、（臨時交易）は馬蓑・罇・木贅椀、年料として馬蓑・田蓑・荏・胡麻子・稗・葦子・糯米が挙げられている。また、F断簡（海部郡断簡）には（進上）交易として白貝内鮓（臨時）交易として馬蓑、年料として（缶カ）・糯米・胡麻子・荏子・稗子・葦子が挙げられている。

先述した『延喜式』の規定と比べれば、合致・不合致がある。これが、天平六年の時代と『延喜式』規定が作成された時代の時代差なのか、あるいは尾張国でのその年の実態にすぎないのか、または貢進物に付随する物品なのか、国府等用物品なのか、不明な点もあるが今は問わない。具体的にみると罇・鹿皮・苧は合致しており、白貝内鮓・鹿革・鹿角・雑鮓・瓠は合致していない。また、（臨時）交易を含めると、罇は合致するが、馬蓑・木贅椀は合致せず、（年料）では胡麻子・荏子・稗子は合致するが、馬蓑・田蓑・（缶カ）・糯米・葦子は合致していない。

とりわけ、『延喜式』に挙げられている絹・油・鹿革・鹿

角、それに海藻類が全く挙がっていない点が大きな違いである。唯一挙がっている魚介類が白貝内鮪であるが、白貝は姥貝の古名とされており、養老賦役令1調絶条の調雑物に白貝殖とみえる。

ここで、白貝に関連して両国に関する『延喜式』の贄規定をみておこう。

⑭『延喜式』卷三十九内膳司42年料御贄条

・尾張国〈為伊二擔廿壺、白貝二擔四壺、蟬蛭二擔四壺、
雉膳納二十八籠、籠別六翼〉、

・参河国〈釋海藻一擔四籠、籠様長一尺二寸、広八寸、
深四寸、他皆同此〉、

とあり、御贄として白貝の貢納規定がみえるが、鮪は尾張国では中男作物に雑魚鮪が挙がっているにすぎない。他の為伊・蟬蛭は容器などから貝類と思われる。また尾張国の雉膳は中男作物に規定のあるものである。また、

⑮『延喜式』卷三十一宮内省44御贄国条

・参河・若狭・紀伊・淡路等四国、〈正月三日節料、並付三内膳司、伊賀・尾張・美濃・阿波等十一国、〈同三節雜給料、付三内膳式〉、

⑯『延喜式』卷三十一宮内省45例貢御贄条

諸国例貢御贄
山城、……尾張〈雉膳〉、……

⑰『延喜式』卷三十九内膳司45参河国保夜条

参河国保夜一斛、

という規定もあり、御贄に関しては後述するが、尾張国の雉膳と三河国の保夜は、やはり特産品と言えよう。

A断簡には②に掲げた年料春米の項目として七四一斛、大炊寮酒料赤米として二五九斛が挙がっており、また先掲の⑧に斎宮寮に送る米三〇〇斛が記されており、⑧によれば斎宮へ送られる春米は二〇〇斛であるから、天平六年度にはそれよりも百石多く送られていることがわかる。

以上からすれば、尾張国は生塩道と青木香・芡菜・稗子・油（胡麻子）・黄蘗と為伊・白貝・蟬蛭と瓷器、参河国は絹糸と海産物（鯛・貽貝・保夜）・黍子が、鹿角菜・青苔・鳥坂苔・那乃利曾・釋海藻、それに両国を通じて黄蘗・雉膳（特に尾張国）・雑土器が特徴的な産物と大きく言える。

二、愛知県内出土・都城出土木簡からみた物品・特産物

では、古代尾張・参河国関係の物品に関する出土資料である木簡には、どのような物品が記されているのであろうか。

⑧下懸遺跡

☐〔算カ〕
☐米物受被☐〔賜カ〕

(136)×36×3 081

このうち、物品に関する内容のものとして、③勝川遺跡の木簡は、下端が欠けており、上の二文字も不明な点が残るが、五斗から俵に付けられた荷札木簡

と思われ、五斗や六斗の米の荷札は庸米の荷札木簡である可能性もある。④志賀公園遺跡の木簡は、「六束」の刻書や

「五束」の文字があり、「人員・稲束の管理に関わって作成された木簡群である可能性が^③ある」とされている。下懸遺跡の木簡も、米や物の収授に関わるものだが、

不明な点が多い。

いずれも米・稲に関するものだが、現在の所、尾張・参河国地域での、それ以上の物品の情報は残念ながら得ることができない。

そこで、平城宮などの宮都から出土した木簡をみてみた

表5 調・庸等記載の尾張・参河国別木簡数

	調	庸	中男作物	贅	不明	計
尾張国	10	3	0	0	33	46
参河国	8	4	2	64	32	110

表6 郡別の物品名記載木簡数

国名	郡名	件数
尾張国	中嶋	3
	海部	3
	葉票	4
	丹羽	2
	春部	3 (4)
	山田	5 (6)
	愛智	3
	知多	20
	不明	2
	計	46
参河国	碧海	7
	額田	3
	賀茂	4
	幡豆	80
	宝飯	4
	八名	2
	渥美 (設楽)	12
	不明	—
	計	4
		116

い。これまで出土した木簡の中から、尾張・参河国名があり調・庸などの税名を記した木簡を整理したのが表5である。それを見ると、参河国関係木簡が尾張国関係木簡の約二倍くらいの量があることがわかる。これは、後述するよううに、いわゆる贅木簡が大量に出土しているところからくるものである。なお、これらの多くは荷札木簡であるが、中には荷札木簡以外のものも含まれている可能性もあるう。そこで、尾張国関係の木簡の内訳をみてみると、税目として明記されているのは調・庸(養)全体四六例中、調が一〇例(御調二例)、庸が三例(養一例)、不明三三例である。

調の内訳は、塩関係・庸米、そのほか米(酒米・白米・〔春〕赤米・俵)・魚鮓・〔脯カ〕・荏油・大塩尻が目につく。

郡(評)別は表6のように、推定も含めて全四六例中、知多郡(評)が二〇例、山田郡が五(六)例、春部郡が三(四)例、海部郡・中嶋郡・愛智郡が三例、丹羽郡が二例、葉栗郡が四例、郡不明が二例となる。なお、山田郡と春部郡の()は両郡どちらか不明ということである。

知多郡が二〇例と多いが、塩三斗の調に関する木簡が目立つ。知多郡(評)の塩に関しては、第三章でみたように生道塩が問題となっていた。そこで知多郡(評)の塩に関する木簡に記されたサト名(コザト名)をみると、番賀郷花井里(一例)・贄代郷(四例)朝倉里(一例)・富具郷(三例)野間里(二例)・英比郷(一例)・御宅里(一例、大塩尻)・但馬郷区豆里(一例、御調)・□里(一例、御調)・□□郷須佐里(一例、大□「塩力」が挙げられる。生道は現在の東浦町の名であるが、『和名類聚抄』では英比郷に比定される行政区域であろう。英比郷からは平城宮から一点木簡が出土している(『平城宮木簡』二二八八)のみで、しかも「塩□□」とあり塩一斗のことだとすると、特に多いわけでもない。例えば番賀郷(『同一』三一九)や贄代郷(里)(『同一』三二〇、『平城宮木簡概報』12—10頁上段1)・富具郷(『平城宮木簡三』三〇八〇、『平城宮木簡概報』19—20頁下段3)などからは塩三斗の木簡が出土している。気になるのは知多郡の御宅里から「大塩尻」

と記した木簡が出土している点で、この御宅里がオオザト名であるとなると、十世紀前半に成立した『和名類聚抄』段階では消えてしまったオオザト名ということになる。残念ながら比定地は不明であるが、ミヤケというサト名や「大塩尻」という特殊な記載は気になるところではある。いずれにせよ、現在の所、英比郷から突出して塩関係の木簡が出土しているわけではなく、知多郡から広く塩が産出されていたことになる。第一章の文献からの知見と合わせると、平安時代に入り東寺との関係で求められた塩が、特に生道にちなんで生道塩と後に名付けられた、と考えざるをえないと思われる。

一方、参河国の物品名を記した木簡のうち、税目が記されているのは表5のように、調が八例、庸が四例、中男作物が二例、(御・大)贄が六二例、不明が三二例である。やはり(御・大)贄の六二例が目をはひくが、内訳は佐米・佐米楚割・佐米臚・黒鯛(大贄)・鯛楚割・宇波加・須々岐楚割・赤魚・赤魚楚割・毛都楚割などが記されている。

その他の調として、塩(渥美郡から一斗、あるいは飽海郡から御調として三斗)、小凝(イギス、幡豆郡)がみえる。中男作物としては小凝(宝飯郡)、庸は塩一斗五升(飽海郡)・米五斗(八名郡・額田郡)が挙げられる。そのほか、春米・多比・海松(ミル)・蘇がある。

尾張国と異なるのは、贄がみえることで、物品としては佐米・佐米楚割・佐米臚・黒鯛（大贄）・鯛楚割・宇波加・須々岐楚割・赤魚・赤魚楚割・毛都楚割などが記されている。

郡（評）別には表6のように推定も含めて全一一六例も多きにのぼるが、幡豆郡が八〇例の多きにのぼり、次いで渥美郡が一二例、碧海郡が七例、宝飯郡が四例、賀茂郡が四例、額田郡が三例、八名郡が二例、不明が四例である。

以上から、現在出土の木簡でわかることは、物品では塩・米など以外には、やはり参河国幡豆郡からの贄の魚介類が突出していることである。贄とは古代では天皇（大王）に対する食料品などの貢納をさし、魚介類・海藻類・鳥獸などの山海の産物が中心である。大化二年の大化改新詔に「田之調」は五十戸が賦課単位かと言われており、「戸別之調」（付加税）と「調副物塩贄」があり、ここに塩と並んで「贄」がでてくる。そして、天武朝頃に個別人身賦課の調へ転換し、贄は国郡や地域を対象とする貢納物となったとされる。

令に贄の規定はないが、第二章に掲げたように『延喜式』卷三十一宮内省44御贄国条（⑮）・45例貢御贄条（⑯）には、参河国が若狭・紀伊・淡路等三国と並んで、正月三節料として雉を内膳司家に、また『延喜式』卷三十九内膳司

42年料御贄条によれば年料として、尾張国から為伊・白貝・蜊蜆・雉腊が、参河国から穉海藻が贄殿に收納され供御に擬されることになっており、その他『延喜式』内膳司45参河国保夜条から参河国から保夜一斛が毎年交易進上され、内膳司家に収められ、天皇・中宮の供御物とされたことがわかる。年料として尾張国から貢進される為伊・白貝・蜊蜆も先述したように貝類であろう。

以上のことから、両国とも雉貢進がみえるが、尾張国では雉腊も贄として貢進されることになっていったこと、同じ海産物でも尾張が貝類なのに対して、参河国はワカメと東の遠江・下総国につながる海藻類が穫れたことがわかる。

ところで、平城宮出土の「参河国幡豆郡析嶋海部供奉八月料御贄佐米楚割六斤」^⑳などのいわゆる贄木簡は、一九六三年に発見された平城宮内裏北外郭官衙ゴミ穴SK800（天平十七（七四五）～十九（七四七）年頃使用）から出土したものであったが、その後二条大路から出土した木簡により、幡豆郡から贄木簡の出土例はさらに増加した。贄木簡の出土増加により、贄制度の研究は大いに進展したが、参河国三嶋からの贄木簡の特徴を概観すれば、貢進地を記し貢進者名はなく集団としての海部が供え奉ったとあり、個人的の割り当て「六斤」（約4kg）が共通で、月料の形をとり、おおむね奇数月は篠嶋、偶数月は析嶋（現在の佐

久島）が担当し、他に日莫嶋（現在の日間賀島）もあり、三嶋特有の佐米楚割（細長く切った鮫の干物）が多く、郡衙段階以上で書かれたと言われている^⑧。先に見た三島からの贅木簡と、『延喜式』の規定をどのように整合的に捉えるかについて、参河国の調の「鯛楚割九十斤」「鯛脯一百斤」「雑魚楚割二千五百五十一斤」が篠嶋郷・析嶋郷の贄貢進分で、一人当たり調の負担は六斤なので、雑魚楚割は約四百二十五人分、鯛が十五人分で計四百四十人分、これはほぼ二郷分に相当するという理解^⑨が当を得ていると思う。

おわりに

最後に多岐にわたった論点をまとめておきたい。

まず、文献史料と木簡資料が語る特産物の対照表（表7）を参照されたい。

尾張国と参河国は、古代での米生産などからみた国力はさほど変わらない規定となっていた。両国とも絹糸生産が行われており、絹製品の技術力は尾張国が参河国より少し進んでいたと言えるが、三河国の絹糸は優品であった。尾張国は生塩道と青木香・芡菜・稗子・油（胡麻子）と為伊・白貝・蟬蛻・雉腊と瓷器、参河国は絹糸（犬頭糸）と魚介類（鯛・貽貝・保夜）と海藻類（海松・海藻根・青苔・鳥

坂苔）と黍子・鹿皮、それに海藻類（那乃利曾・釋海藻、鹿角菜・凝菜・於胡菜）や黄蘗・雉・雑土器は両国通じて特徴的な産物と大きくまとめられよう。尾張国と参河国は共に海に面していたが、参河国が篠嶋・析嶋（佐久島）・日莫嶋（日間賀島）の三島を領有していた点が大きな相違点となったと思われる。尾張国は塩の生産と介類が、参河国は魚類や海藻が朝廷に求められたものであった。さらに言うなら、尾張国は油（胡麻子）や稗子が求められ、参河国からは黍子が求められているのは、恐らく特に栽培奨励がなされており、また特に尾張国から雉腊が求められ、参河国からは鹿皮が求められたのは、それらの鳥や動物が豊富であることを国家が掌握していたからである。とりわけ尾張国の生道塩と参河国の犬頭糸は、塩と絹糸の産地であり優品であることに加え、犬頭糸から推測するに生道塩も何らかの伝承に基づく物品であったのであろう。海の側面から言えば、尾張国は塩の生産や貝の採取という海浜国で、参河国は魚介類や海藻をとる漁業国で、陸の側面から言えば、朝廷からすれば、尾張国は塩・薬香料・油・瓷器の生産国で、参河国は絹糸・白絹の生産国であったとも言えよう。

最後に、尾張国と参河国からの物品貢進方法について付言しておきたい（表8）。特産物に関しては、例えば繊維

表7 『延喜式』規定・出土木簡・正税帳からみた物品対照表

		尾 張 国			参 河 国		備 考
		『延喜式』	出土木簡	正税帳	『延喜式』	出土木簡	
調	絹糸塩魚介海藻	○☆ ○☆ ○☆ ×☆ ₁	○□	○ ₃ ○ ₄	○ ○△ × ○☆	○ ○	○ ₃ 錦・綾 ○ ₄ 紫糸 △ 大嘗祭神服調糸 ☆ ₁ 雑腊 ○ 小凝
	自余 絹糸塩	○ ○ ○			○ × ×		
中男作物	麻黄蘗紙紅花席油雑腊魚介海藻交菜	○ ○ ○ ○ × ○ ○☆ ○☆ × ☆ ₂	□		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	 ○	☆ 鳥腊 ☆ 雑腊・□〔臑カ〕・魚鮓
	櫃 自余 米塩	○ ○ ○	○□		○☆ ○	○□ ○□	
費	魚介海藻雑腊	○ × ○			○ ₁ × ○ ₅	○ ₂	○ ₁ 保夜 ○ ₂ 佐米・須々岐他 ○ ₅ 雉
	絹油樽鹿苧種子海藻	○ ○ ○ ○ ○ ○	□	○ ₁ ○ ○ ○ ₂	○ × ○ ○ ○☆ ○		□ 荏油 ○ ₁ 臨時交易 ○ ₂ 年料
年料別貢雑物	筆紙麻青木香黄楊馬革魚介瓠馬蓑木贅槐田蓑(缶)	○☆ ○ ○ ○ × ○ ○		○ ○ ₁ ○ ₁ ○ ₂ ○ ₂	○ ○ × ○ ×		○ ₁ 臨時交易 ○ ₁ 臨時交易 ○ ₂ 年料 ○ ₂ 年料
年料雑器	瓷器等	○△			×△		△ 大嘗祭雑器
年料雑薬	薬	○			○		
年料春米	米	○☆	□	○ ₂	○☆	□ ₁	☆ 春米 □ ₁ (春)赤米 ○ ₂ 年料(糯米)
年料租春米	米	○			○		
貢蘇	蘇	○			○	○	

- ☆は『延喜式』巻五斎宮78条による。物品は「調庸」と京庫に請い受けた雑物とあり、基本的に調・庸同名物品の場合は、調と中男作物に分類した。なお、鮓も魚介に含めた。
- は税目名が不明であるが、物品名から分類した。
- ₂ 年料は物品名から適宜分類した。(缶)字は推定文字である。
- ☆₂は『延喜式』の調・中男作物・庸の品目にないので、物品名の性格から中男作物に分類した。

表 8 尾張・参河国からの税と物品貢進墨書方法

	調			庸		贄		年料 春米	貢蘇	交易 雑物
	物品名	糸・綿 絹・綾・麻布	海藻類・魚介類・塩	櫃	米・塩	海藻類 魚介類 塩	付札	春米	蘇	油
	墨書の方法	実物墨書	付札	実物墨書	付札	付札	付札	付札	付札	付札
木簡の有無		×	×	○	×	○	○	○	○	○

注) 糸・櫃の墨書方法は推定であり、付札を使用した可能性も考えられる。

里戸主姓名年月日、各以「国印」々之」とあるように、直接に実物（あるいは包装囊）に記された墨書銘（調庸墨書銘）、あるいは紙箋という形で貢進されていたわけである。直接的な資料は残念ながら、正倉院に残された他国の調・庸関係の純の実物の形でしか知ることが出来ないが、尾張・参河国の絹も恐らくそのような形態をとっていたのである。一方、塩や海産物（魚介類・海藻類）などの貢進物付札・荷札木簡などは、今後も増加が見込めるものである。贄木簡は確かに大きな発見で参河国三島、ひいては参河国の特産物として注目すべきものではあるが、本論で述べたように令や『延喜式』等の法制史料や正税帳などの紙に記された史料によって、相対化が図られるものであると思う。以上、雑駁な論に終始したが、今後の古代尾張・参河国に関する出土遺物や遺跡を考える場合に、資することがあれば幸いである。

註

製品は『延喜式』卷二十二民部省上15絹絶尺寸条には「凡諸国調絹絶、六丈之外、令足裹足、不限尺寸」とあるように、製品を包むための絹・絶分を余計に貢進させることになっていた。また、養老賦役令²調皆随近条には「凡調、皆随近合成。絹絶布両頭、及糸綿囊、具注国郡

- (1) 「古代参河国と犬頭糸・白絹」〔安城市史研究〕七号、二〇〇六年・『新編 安城市史―通史編 原始・古代・中世』（安城市、二〇〇七年）。
- (2) 古代両国は『延喜式』卷二十二民部省上²東海道条に

よれば、大・上・中・下国の上国と位置づけられていた。等級基準は、面積や租税請負人口であったと想定されている。但し、養老令70大國条の国司構成から言えば、尾張国は大小目二人を有する大國扱いであった（天平6年度尾張国正税帳・『類聚三代格』仁寿三年（八五三）六月八日太政官奏）。

- (3) 早川庄八「律令財政の構造とその変質」『日本古代の財政制度』所収、名著刊行会、二〇〇〇年、初出一九六五年）。

- (4) 年料租春米は遠江国が東限である。なお、位禄・季禄・衣服などの料に充てる年料別納租穀という規定も『延喜式』にはあるが、②に掲げた年料租春米の割り当て国と重なっておらず、尾張・参河国の割り当てではない。これらの規定の東限が、輸送の便を考えての割り当てであることは、言うまでもない。

- (5) 『延喜式』条文本文に関しては虎尾俊哉編『訳注日本史料 延喜式 上・中』（集英社、二〇〇〇・二〇〇七年）と『新訂増補 国史大系 延喜式 後編』（吉川弘文館、一九七四年）による。また前者の頭注・補注を参考にした。

- (6) 練糸とは『延喜式』卷二十二民部省上16練糸条に、練り染めの糸は四糸を一縷とし、練り染めた後に絢とする、

とある。

- (7) 樽のように、負担国に均等割の数値としか考えられない物もあるが、苧のように両国と隣国の遠江国の特徴といえるものもある。苧は遠江国の一三〇斤に次いで尾張国が一〇斤で、参河国が九〇斤、それに上野国八〇斤とあるだけであり、東海地方に集中している。これらは布の原材料である。

- (8) 西宮註（1）論文参照。

- (9) 註（8）と同じ。

- (10) 『貞観』儀式』第四の諸司諸国に頒下する官符宣旨例として、

太政官符参河国司

応進_レ上服部女三人、服長一人、神調糸五絢_レ使

其位神服某甲

右、為_レ供_レ奉大嘗会、其所差_レ件人、充_レ使所喚

如_レ件、国宜承知、使_レ賈_レ調糸_レ依_レ例進上、

とあり、『貞観』儀式』編纂年代（貞観十四年（八七二）〜同十九年（八七七）とみられている）迄、この規定は遡ることになる。ちなみに、『貞観式』は貞観十三年（八七一）施行であるが、『貞観式』に踐祚大嘗会（祭）の巻はなく、「弘仁式」にある。

- (11) 福岡氏は、この箇所に関する写本の文字の異同の検討

を詳細に行い、「生道塩」が本文にないのが原態と論じており、そこから『延喜式』写本の系統まで論じている（『生道塩』を追って）『新編 東浦町誌 本文編』所収、東浦町誌編さん委員会、一九九八年）一〇八頁。

- (12) 土御門本の書誌については、田島公「土御門本『延喜式』覚書」（門脇禎二編『日本古代国家の展開 下』所収、思文閣出版、一九九五年）が詳しい。

- (13) 『続々群書類従 第十二』（国書刊行会、一九〇七年）十七頁。

- (14) 福岡氏は註（11）論文で、このことは『東宝記』の官符とも整合的であると述べているが、『東宝記』の官符が法源でありそれを基軸にすれば、さらに『延喜式』の当該条文の「生道塩」は混入であったことは明白となる。なお、米・灯料油・酢は『延喜式』卷三十三大膳職下1東寺中台等条にないが、米と灯料油は『延喜式』卷三十五大炊寮21東寺中台五仏条と卷三十六主殿寮11諸寺年料油条にみえる。酢は『延喜式』段階では使用されなくなつたようだ。

- (15) 『日本暦日原典』（雄山閣出版、一九七五年）。

- (16) 『熱田神宮文書 宝庫文書』（熱田神宮宮庁、一九七八年）十三頁。

- (17) 立松彰「知多の土器製塩と『生道塩』（『知多古文化

研究』五、一九八九年）、福岡猛志「生道塩と『延喜式』（『新編 古代の日本』八（月報）、一九九三年）、福岡猛志「木簡の世界」（『生道塩』を追って）（『東浦町史』所収、東浦町、一九九八年）。

- (18) 立松氏によれば、古代の愛知県の製塩土器は、1知多式製塩土器・2渥美式製塩土器・3篠嶋式製塩土器、と分類区分されており、その1にあたる。知多半島の製塩土器は五世紀の後半から作られ出すが、七世紀後半から知多式4類と呼ばれる手早く砂に突き刺すことのできる細身で先が鋭利に尖った脚部をもつ製塩土器が作られるという。また、知多半島では海岸の全域で塩作りが行われ出し、土器製塩の最盛期を迎え、その背景は律令体制に基づく調庸塩の貢納品生産にあったとされている。小型で統一されており、煎熬（製塩のため鹹水を煮詰める作業工程）作業の効率化を図った製塩土器が使用されはじめたという。そして九世紀後半に坏部が浅鉢形の知多式5類と称されるものが作り出される。これは胎土に粉殻を混入するものが多くなり粘土の緻密さを欠くとともに、坏部が深鉢形から碗形になるなどし、この製塩土器は煎熬用ではなく、焼塩（固形塩）専用のものではないかと考えられている（立松彰「塩生産」（『愛知県史料編 4 飛鳥く平安』所収、愛知県、二〇一〇年））。

製塩の諸段階に關して、森康通氏は、「一般に、古代

における塩生産の工程は、海水の塩濃度を高める「採鹹」、それを煮詰める「煎熬」、そこからできた粗塩を再加熱してにがり（マグネシウムなどの不純物）を取り除き、潮解性（湿気を帯びてべたつく性質）を減じて固形塩（堅塩）をつくる「焼き塩」の3つに大別されている」（五九頁）とし、6段階（案）を提示している。また土器製塩でできる塩は基本的に固形塩で、「古代の史料や木簡において確認できる塩の流通単位は、散状塩を示す斗・升系が圧倒的に多いが、これは遠距離輸送される貢納塩が、基本的に俵に詰め替えられた散状塩であることに起因している」（六〇頁）、「ただし、愛知県における鉄釜の普及は、製塩土器が大型化する9世紀か、第2工程の土器の器形が碗形となる10世紀を待たなければならなかった可能性がある。段階5は段階4に入るとまもなく始まったと考えるの自然であろう。・・・やがて、堅塩作成用の土器が姿を消す平安時代にはおそらく段階6に移行し、基本的には昭和60年代のイオン交換膜法の導入まで続いたと考えられる」（六四頁）としている（森康通「東海地域における古代土器製塩覚え書き2009—内陸部から出土する製塩土器の意味を考えるために—」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム、二〇一〇

年）。

(19) 森註(18)論文。

(20) 立松彰「知多の土器製塩と『生道塩』」(『知多古文化研究』五、一九八九年)。

(21) 西宮註(1)論文。

(22) 青木香は寺院でも香として活用されていたようで、大安寺伽藍縁起并流記資財帳に、前岡本宮御宇(舒明)天皇が庚子年に青木香七十五斤十五兩(仏物七十三斤二兩、法物二斤十三兩)を納めたとある(『大日本古文書』編年文書(以下、同じ)二卷六三九頁)のが古い。法隆寺伽藍縁起并流記資財帳によれば、天平六年二月と天平八年二月二十二日に平城宮の皇后宮から仏分の青木香二百八十一兩と丈六分として青木香四十八兩などが納められており(『大日本古文書』二卷六〇二頁)、天平勝宝八歳七月八日に孝謙天皇の勅により「内司供擬之物」として青木香二〇節などが法隆寺に献上されている(『大日本古文書』四卷一七六頁)。これらは、天皇や皇后からの命で、寺院内で仏物用と法物用に使用されたようだ。また、天平十三年三月九日に大般若經三百卷とともに青木(香)一袋などを請求した奉請文があり(『大日本古文書』二十四卷一二九頁)、天平勝宝四年六月十五日に中臣伊勢連老人が青木香などを綿で買い入れている

『大日本古文書』二十五卷四五頁)。「買物申請帳」によれば、翌十六日に九種のを購入した中に青木香がみえ、直として綿三斤とあり、同月二十一日にも青木香五斤などがみえる(『大日本古文書』三卷五七九〜五八一頁)。

なお、前者は『大日本古文書』二十五卷四六頁にもみえる)。天平宝字六年、造東大寺司による大般若経二部写経のための錢用帳に、閏十二月二十七日青木(香)五兩の直二十五文とあり、一兩五文という値段であった(『大日本古文書』五卷三二五頁)、『大日本古文書』十六卷一〇〇頁)。天平宝字六年出納帳に閏十二月二十七日として、采女山守鴨部養麻呂らに附け買い求め、検納した中に青木香五兩がみえる(『大日本古文書』十六卷一二七頁)。なお、経巻納櫃帳によれば、甲・乙・丁・戊・己・庚・辛櫃に経巻とともに青木(香)一袋(丁櫃は「生木香」と記される)が納入されていた(『大日本古文書』七卷一九八・一九九・二〇三・二〇七・二一二・二一三・二二五頁)。ように、青木香などの用途は経巻を納める櫃に納入され、香として使用されていたことがわかる。

なお、中倉保管の「密陀彩絵箱」第十四号(中倉一四三)の蓋上に「納(丁香青木香/會前東大寺)」とあり、大仏開眼会に先だって献納された丁香・青木香と推測さ

れており(『正倉院寶物5 中倉II』(毎日新聞社、一九九五年)五九・二四八頁)、この青木香はやはり仏教行事に使用された香とみなされる。

(23) 『正倉院宝物銘文集』(吉川弘文館、一九七八年)一六八頁。

(24) 正倉院には「青木香」と題箋のある香薬(北倉一一六)がある。第一次調査のおり、それは北倉九三号の「人參」と同じものであるが、それは「人參」ではなく、防葵か狼毒、ことに前者ではないかと推定された(『正倉院薬物』(植物文献刊行会、一九五五年))。一方、北倉九三の「人參」は狭義のイケマの根にほぼ一致し、広義ではガイモ科またはキョウチクトウ科植物に近似し理論的には防葵に該当するとも推定されている(同上)。その一方で、北倉一一八号の木香は現代の唐木香と同じで、*Saussurea lappa* C. B. CLARKE (キク科 Compositae) の根で「青木香」の名称で納められたと推定されている(同書)。その後、第二次調査が行われ、北倉九三号の生薬は *Gynanchum* 属植物に由来する物であることは確実であるが、種の確定には至っていないとされた(図説「正倉院薬物」(中央公論新社、二〇〇〇年))。また、法隆寺宝物として草花銀絵漆皮箱(N一一五)と題箋される箱に納められているものについて、「木香」とよく

合致し、今日広く用いられている木香と変わらないという（米田該典「香と香材の調査」『正倉院の香葉』所収、思文閣出版、二〇一五年）。「木香」とは、キク科のモッコウを原植物とするといい、自生地はインド北部のカシミール地方に局限されるという（同上書）、米田氏は「古代には木香と青木香とは同一の香葉で、一物二名であったとしてよいであろう」としている（同上書、一〇六頁）。木香を青木香と同じとする論拠は、「鳥毛立女屏風」の下貼文書に天平勝宝四年六月に木香が購入されていた記録から、先の「密陀彩絵箱」第一四号の「青木香」と関連づけ可能性を推定している点、また『神農本草經集注』に木香を青木香とする点、であろう。天平勝宝四年の「鳥毛立女屏風下貼文書」には、確かに青木香五斤などが記されており（東野治之「鳥毛立女屏風下貼文書の研究」〈『正倉院文書と木簡の研究』所収、塙書房、一九七七年、初出一九七四年〉）、原産地は中国南部・真正品はインドのカシミールとされている（山田憲太郎『東西香葉史』〈福村書店、一九五六年〉三三七頁）。

以上の分析は、尊重されねばならない。しかし註（22）で掲げた『延喜式』や正倉院文書に散見する青木香の使用は確かに香として使用されており、木香とみなせば理解しやすいが、本文で述べたように尾張国など国内から

貢進されている青木香は、木香の産地からすれば当てはまらないことになる。北倉九三号の生薬が納入された時期は記録になく、由来も不明である（前掲『図説 正倉院薬物』、一一八頁）ことからすれば、これ以上不明とせざるをえない。なお、十一世紀に陳承が「重廣補注神農本草并圖經」で木香の一種の海州木香が馬兜鈴と同等して以来、それを採る説が多くなったという（前掲『正倉院薬物』、三三九頁）。馬兜鈴は日本では馬鈴草（ウマノスズクサ）のことで、本州の関東地方以西に生えており、つる性多年草で根の薬用部分を（土）青木香といい、日干しにしたのを用い、根は降圧・鎮静・気管支拡張・抗菌などの作用がある（『原色牧野倭漢薬草大圖鑑』〈北隆館、一九八八年〉三三頁。『本朝綱目啓蒙2』〈平凡社、一九九一年〉六五〜六頁参照）というが、香というより薬効を期待するもので、註（22）の使用法とは異なる。この点、後考を俟ちたい。

（25）『延喜式』卷十七内匠寮35位記料条に黄楊軸二〇枚とある。

（26）なお黄楊は櫛の材料にも用いられている（『延喜式』卷五斎宮66供新嘗条）。

（27）馬草は『延喜式』卷二十三民部省下45条によれば、六国一〇〇張が規定されており、例えば播磨国から三十二

張とあるように他国と比べてそれほど多い数ではない。

馬の革は兵庫寮の甲の修理に用いられたが、駅・伝・牧などの死馬の皮を利用し、不足の場合は買い揃えることになっていた。

(28)

山下峰司「弘仁瓷器」と国衙工房」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X、一九九一年)・高橋照彦「『瓷器』『茶碗』『葉碗』考」(『国立歴史民俗博物館研究報告』七一、一九九七年)。なお、『日本後紀』弘仁六年正月丁丑条に、尾張国山田郡三家人部乙麻呂ら三人が瓷器製法の伝習を受け業を成したとあり、ここから緑釉陶器生産が開始されたという(高橋照彦「平安初期における鉛釉陶器生産の変質」『史林』七七―六、一九九四年)。

(29)

『貞観』儀式』第四の諸司諸国に頒下する官符宣旨例として、

太政官符諸国(毎国、有符)

応造新器

・
・
・

尾張国

甕埴各八口、瓮五十口、高坏卅口、越十口、中埴十二口、短女坏卅口、御酒瓶八口、大甕十二口、小坏十二口、飾埴八口、甕十六口、片坏卅口、酒垂八口、瓦碓八口、管坏卅口、

参河国

等呂須岐卅口、都婆波卅二口、多志良加八口、山坏小坏各六十口、已豆伎甕各六十口、

・
・
・

已上人給料

とあり、『延喜式』規定と若干の相違がみられる。なお、『延喜式』卷三十一宮内省15大嘗会年条によれば、五国の中に「尾張・美濃兩國一人」とあり、参河国の代わりに美濃の国となっている。もしこれが誤記でないとすれば、いつの段階かに参河から美濃に変化したと言える。しかし、『貞観』儀式』には本論で触れたように参河国とあるので、遅くとも『貞観』儀式』では参河国であったことは言えるであろう。なお、尾張国の瓷器・須恵器の調達方法を墨書土器より述べたものとして、古尾谷知浩「古代尾張国・参河国の手工業」(赤塚次郎編『東海の古代③尾張・参河の古墳と古代社会』所収、同成社、二〇一二年)が有益である。

(30)

東西溝SD五一〇〇から出土した、いわゆる二条大路木簡と呼ばれるものの一つである(『平城宮発掘調査出土木簡概報(三十)』(一九九五年)七頁上段)。掲載された写真から、下端が斜めに切り折られているようにみえ、また上部の切り込みには紐跡らしきものがみえてお

り、明らかに参河国から平城宮に蘇が貢上され、勘検後廃棄されたものであろう。

(31) 『復元天平諸国正税帳』（現代思潮社、一九八五年）

の史料頭注にはA—B—C—F—H—D—G—I—E—Jとあるものの、復元はA—B—C—D—G—I—E—F—H—Jとなっている。なお、『愛知県史 資料編6 古代1』（愛知県、一九九九年）ではA—B—C—F—H—D—G—I—E—Jと復元され、F・Hが海部郡と推定されており、それに拠った。尾張国正税帳については、丸山侑子『尾張国正税帳の一考察』（『ヒストリア』八二号、一九七九年）、榎英一『尾張国正税帳注解』（『名古屋博物館研究紀要』三巻、一九八〇年）、丸山裕美子『正税帳の語る尾張古代史』（犬飼隆・和田明美編『語り継ぐ古代の文字文化』所収、青簡舎、二〇一四年）参照。

(32) C断簡には、太政官符による木簀篋や兵器（年料器仗）

が挙がっている。年料器仗に関しては、『延喜式』巻二十八兵部省75諸国器仗条に規定がある。物品名は甲・横刀・弓・征箭・胡籙で、全国共通の物で特産品とは言えない。なお、諸国から都城に送られる様の器仗には専当官人の姓名が「鐫題」、つまり彫り記すとある。尾張国正税帳にはその他に輶も器仗として記されている。尾張

国正税帳にみえる兵器生産については古尾谷註（29）論文に詳しい。

(33) 雑館の項内に「納缶」とある。これは、雑館を入れる

容器としての缶であるが、直稻が記されているので正税購入されたものである。F断簡の一行目に「缶」が推定されているが、それ以下の物の並びからこれは年料的なものである。しかし、「納缶」の缶はB断簡の年料として記されていない。

(34) 以下、①『木簡研究』第四号（一九八二年）、②『木

簡研究』第八号（一九八六年）、③『木簡研究』第一〇号（一九八八年）、④『木簡研究』第二四号（二〇〇二年）、⑤『木簡研究』第二四号（同）、⑥『木簡研究』第三〇号（二〇〇八年）、⑦『木簡研究』第三三号（二〇一一年）、⑧『木簡研究』第三三号（同）による。なお、筆者はこれまで『歴史研究（愛知教育大学歴史学会）』三六・三七号（一九九一年）に「愛知県出土木簡集成（稿）」として、一九九〇年までの愛知県出土木簡のデータについて集積したことがある。また、このうち⑤の下懸木簡に関しては、『新編安城市史 5 古代・中世』（安城市、二〇〇四年）に採録し詳論した。その後、『愛知県史 資料編6 古代1』（愛知県、一九九九年）・『愛知県史 資料編7 古代2』（愛知県、二〇〇九年）で、

県下出土の木簡の集積がなされている。

- (35) 『木簡研究』第二四号（二〇〇二年）五一頁。『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第90集 志賀公園遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター、二〇〇一年）一六九頁。

- (36) 『平城宮木簡一 解説』（奈良国立文化財研究所、一九六九年）、一三四頁、二六八号。

- (37) 本稿は賛研究自体が目的ではないので詳論しないが、本稿の関心から論文を例示すれば、勝浦令子「律令制下賛貢進の変遷」（『日本歴史』三三二号、一九七七年）、鬼頭清明「『延喜式』と賛」（『賛貢進荷札の分析』（『古代木簡の基礎的研究』塙書房、一九九三年、初出は一九七八年・一九八三年）、俣野好治「木簡にみる八世紀の賛と調」（『新しい歴史学のために』二三三三号、一九九九年）、今津勝紀「律令調制の構造とその歴史的前提」（『日本古代の税制と社会』塙書房、二〇一二年、初出一九九二年）、佐藤全敏「古代天皇の食事と賛」（『日本史研究』五〇一号、二〇〇四年）参照。

- (38) 本稿は参河国三島の賛木簡研究が目的ではないので詳論しないが、それをテーマとしたものに、福岡猛志「三河湾『海部・賛』木簡の諸問題」（『歴史の理論と教育』七二号、一九八八年）、高島英之「参河国幡豆郡賛貢進

付札の再検討」（『史友』二〇号、一九八八年）、樋口知志「『二条大路木簡』と古代の食料品貢進制度」（『木簡研究』第十三号、一九九一年）、山中章「律令国家形成前段階研究の一視点―部民制の成立と三河湾三島の海部」（『広瀬和雄・小路田泰直編『弥生時代千年の問い―古代観の大転換』所収、ゆまに書房、二〇〇三年）、森崇史「三河湾三島の海部による海産物貢納」（赤塚次郎編『尾張・三河の古墳と古代社会』所収、同成社、二〇一二年）、渡辺晃宏「賛貢進と御食国―淡路国と参河国の荷札の基礎的分析」（『文化財論叢』IV 所収、奈良文化財研究所、二〇一二年）、馬場基「参河の海の賛木簡の語ること」（田島公編『史料から読み解く三河』所収、笠間書院、二〇一二年）等を参照のこと。

- (39) 渡辺晃宏『平城京一三〇〇年全検証』（柏書房、二〇一〇年）二七八頁。同氏の註（38）論文に詳しい。渡辺氏は「要するに、天皇の食料を負担して服属関係を確認する」という律令制以前の慣習を律令の規定の枠内で運用しようとしたのが賛の実態で、「持統行幸の意を受けた参河国から特別な書式に基づいた賛の貢進が確立する」とし、「海部供奉」の書式は八世紀から」で「じつはすぐれて律令制的な貢進」としている（同上）。なお、佐藤註（37）論文に拠れば、八世紀は、a 賛・調雑物系の

賛、b 毎月異味系の賛（近江・志摩・若狭・紀伊・淡路）、
c 雑供戸系の賛に分けられるが、参河国の賛木簡は a と
いうことになり、九世紀の賛については、A 年料系の賛、
B 旬料系の賛、C 賛戸系の賛、D 日次系の賛、E 節料系
の賛に分けられるが、参河国の賛木簡は A と E というこ
とになる。

(40)

今泉隆雄「貢進物付札の諸問題」〔古代木簡の研究〕
所収、吉川弘文館、一九九八年、初出一九八七年）・東
（野治之「古代税制と荷札木簡」〔日本古代の木簡の研究〕
所収、塙書房、一九八三年、初出一九八〇年）、近年で
は今津勝紀「調庸墨書銘と荷札木簡」(註(37) 書所収、
初出一九八九年)、亀谷弘明「調庸布墨書銘と徴税機能」
〔国立歴史民俗博物館研究報告〕七九集、一九九九年)、
渡辺晃宏「籍帳論」(平川南・沖森卓也・榮原永遠男・
山中章編『文字と古代日本 1 支配と文字』所収、吉川
弘文館、二〇〇四年)、また吉川真司「税の貢進」(同上
編『文字と古代日本 3 流通と文字』所収、吉川弘文館、
二〇〇五年) が詳しい。なお、馬場基「荷札と荷物のか
たるもの」〔木簡研究〕第三〇号(二〇〇八年) では荷
札を付けない賛の存在を想定している。

(41)

例えば「遠江国敷智郡竹田郷戸主刑部真須弥調黄絶六
丈天平十五年十月」〔正倉院宝物銘文集成〕(註(23)

書〕三二六～七頁) のような、純に直接記された銘文で
想定することができる。

(42)

なお、調庸墨書銘と荷札木簡に関する機能については
吉川註(40) 論文参照。

(付記)

本稿の梗概と結論に関しては、二〇一四年二月二日に
名古屋国立博物館で行われた、「文字のチカラ 古代東海
の文字世界」に伴うシンポジウムで報告したものである。
その後、二〇一六年二月五日の定年最終講義において、
改めて全体像を述べたものを原稿化したものである。そ
の後、『愛知県史 通史編 1 原始・古代』(愛知県、二
〇一六年三月) が刊行され、関連するところも多いが、
すでに稿を成しており論の目的も異なるため、そのま
まの形とした。